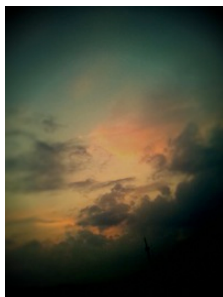


<司書の旅：都路レポート> 高橋咲子（ミミオ図書館司書）



都路は、今回の会場である応急仮設住宅の住民がもともと住んでいたまち。坂本さんと下見に訪れた際、ボランティアセンター今泉さん（旧都路村役場総務課長）からお話をうかがうなかでどうしても灯まつりに行きたくなりました。ただ仕事の関係で当日は参加できません。そこで図々しくも今泉さんをお願いしてミミオ閉館後、司書の富重さんと一緒に都路へ連れて行ってもらいました。案内して下さったのは、当日の会場（旧都路中グラウンド）、2010年までの会場（グリーンパーク都路）、田村市と大熊町の境（原発から15^{キロメートル}）で進入規制がされている一箇所でした。



日中は日差しが照りつける暑さだったのですがうって変わって夕方からは涼しい風が吹いてきます。国道228号を東に進み、山道に行くにつれさらに風は冷たくなってきました。緑に夕立後のもやが立ちこめる中を車は行きます。

以前、都路に住む人の主な仕事は炭焼きや農業だったと今泉さんは言います。でも40年前に原発が出来て以来、その場所まで30～40分と便利のいい都路では関連産業に務める人が増えたということです。だから原発事故が起きても、表だって強い口調で非難する人は少ないと。「あきらめているんでしょうね」と今泉さん。表だって非難するより、その方がもっと辛いでしょう。

窓からは、入母屋造りの大きな家が見えます。「あの家は仮設」「あそこは借り上げ（住宅）」「ここは茨城」。今泉さんが家の主の避難先を教えてくださいます。都路（みやこじ）という美しい名前の由来は源平合戦の落ち武者が流れて来たから、都へ行く道だから、などという話があるそうです。原発事故前は850世帯、3000人が住んでいました。都路地区は原発から20km圏内と20～30kmにわかれ、20km圏内は今年4月に警戒区域が解除されたため日中帰宅ができるようになったそうです。今は約2割が都路地区に住んでいるとのこと。既に公共施設の除染は一度済んでいるのですが、線量が高いため小中学校は閉鎖。このため子どもたちがいる家庭は、線量が低くなるまで都路に戻れません。

都路の中心地区、古道（ふるみち）には役場や都路中、古道小などがあります。どれも新しくモダンな建物なのですが、学校に通う子どもたちはいません。これまで灯まつりを開催していたのはグリーンパークですが線量が高く（29日は毎時0・773マイクロシーベルト）

閉鎖中のため今回は都路中のグラウンドで行います。グラウンドに下りて歩いていると、「遠き山に陽は落ちて」のメロディが。午後6時、子どもたちに帰りをうながすメロディです。



野外キャンプ場であるグリーンパークに向かって車は進みます。対向車は一台もありません。開けっ放しにした窓からはヒグラシの声。よく見ると、田んぼや畑は草が伸び放題になっています。グリーンパークに車を止めて、夕暮れの空のなかに3人で立ちます。草いさけ、ヒグラシの声、水が流れる音。とても気持ちのいい風。「静かですねー」と言うと、今泉さんが「いいところなんですけどね...」。灯まつりは2010年で8回目。1万本の竹灯籠をともすので、1万人の来客が目標だったそう。だんだん認知度も上がり、2010年は約8000人が訪れた。仮設住宅で話したおばばは、「天の川みたいだった」と教えてくれました。復興祭を兼ねて行う今年の祭りにはいったい何人が来るのか、今泉さんはちょっと心配そうでした。

よく目を凝らさなければ拍子抜けするぐらい当たり前の、田舎の風景でした。東京の人が九州に避難したり、福島の食べ物が敬遠されたり、そんな原発を巡る騒々しさとはまったく別の世界でした。今泉さんは、私たち司書に2010年の灯まつりの光景（幻想的！）を見てほしいということで、写真を貸してくださいました。

高橋さん、すばらしい都路リポートありがとうございます！読んでいたら風景が浮かんできました。今泉さんは昨年4月に長年勤務していた市役所の退職を目前に3.11の被害に遭われ、それから退職までの数週間が怒濤のような日々であったそうです。また行政などの仕組や対応のいろいろなものを見るはめになった、と静かにおっしゃってました。今回のミミオ図書館をやると決断したのも、退職した今泉さんが全責任を取ると市にいつてくれたおかげです。灯まつり、今年行けなくとも来年がありますから、来年もミミオ図書館開架したい。東北に親戚が増えていくようだなー。

館長